



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.151  
2016.4.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

48

## 「長野県埋蔵文化財センターの設立と調査部長に(S57~59, 1982~84)」

私が長野県考古学会事務局長をしているとき、1981年の総会で6号議案に長野県教育委員会への要望があり、埋蔵文化財センター設置をあげ、3月に県教育委員会へ要望書を提出した。9月の『信濃考古』67号の巻頭は「県立埋蔵文化財センターの設立を要望する」を、11月の68号には埋文センターへの取り組みとして 1.県・県教育委員会・県議会に陳情書 2.要請署名 3.請願書 4.知事・県教育長へのはがき 5.市町村教育委員会への呼びかけ を会員に活動を促した。12月 県会に請願書を 副知事に要請署名を渡し、12月県会で質問があり 知事は設立の方向で検討と答えた。翌年にはマスコミにも記事となり1月11日の知事記者会見で設置を明言した。この背景には冬季オリンピックが長野へとなり、交通網の整備が計画され中央道を岡谷市から長野市への分岐線長野道と東京から長野への新幹線があり、用地内遺跡調査が早急に要求された。その対応は県がとなって設置となったが、県立ではなく財団法人ということで一歩退いた形にて実現された。

82年4月 岡谷市に事務局を置いて発足した。皮肉にも初代調査部長に私になった。中央道遺跡調査団のときと同じく全くゼロからの出発で、違っているのは県職員OBが所長・事務局長に、調査部は小中高の教員が出向して10人の12名のスタートでした。事務所は机も無い全くの空き家で、みんなで掃除をし、岡谷市教育委員会の会田進君の案内で市内の業者を回り必要家具・文具を県の出先だと説明して後払いで調達した。10名の調査員は全員が考古学専攻者ではなく、社会科教師という人も居て、班分担で考古学専攻者を年令に関係なく班長にしたら、所長から年令を無視したことに批判があった。発掘現場では考古学の知識が優先されると説明して了解してもらった。



▲1982長野県埋文センター職員

くしくも私は中央道遺跡調査団調査主任と財・県埋文センター調査部長としてゼロからの出発に関わった。前者は任意団体 後者は財団の違いはあるが財政的には道路公団の原因者負担に寄る点は全く同じであった。中央道調査団では主任の私が予算の積算・用具の購入・会計支出・決算をしたので大変だった。今回は県職OBが会計事務を担当したので雑用から外れて助かった。事務所は現場によって移動する点は同じであり、事務所の用地探し・プレハブ建物の不便さは当分ついて回る問題点でした。

センターになっての良さは調査員が教員で身分が保証されていることだが 考古学専門で無い単なる社会科教師もいて専門知識に差があった。奈文研・各地のセンター・遺跡現場見学・研究会等への研修が出来て力の向上が出来た。雨天で調査できない日は調査員が交代で発表する学習会も持った。2年目にはワープロが入ったので『考古学雑誌』と題して研究発表の冊子をつくった。問題点は県費負担が無いので普及・研究活動が出来なく、調査員の研究発表の紀要の出版が出来ない。市町村への派遣が出来ない。教員給料には残業手当が入っているというが、県職のように毎日の残業の手当てが明確でない不満があった。

調査員百瀬長久君が用地内を歩いて新遺跡を発見し、扱いについて試掘・現地協議となり、公団はどうして今になってと、前に立会い調査したのにセンターの仕事を増やすためかというが、工事中にストップされたら困るからと契約を改めて結び発掘調査となった。結果 奈良時代の終末期古墳的な墳墓と副葬品に唐式鏡を検出し、一躍注目される遺跡となった。

この経験から、塩尻市内の用地内遺跡の確認調査を平出考古博物館小林康男君と行う。このとき田川右岸に吉田向井遺跡を調査しているので、対岸も遺跡ではないかと地図に入れた。これが吉田川西遺跡であり、調査の結果見事な成果を見た。

試掘による分布調査の必要性を痛感した。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

- |   |  |
|---|--|
| ■田舎考古学人回想誌 長野県埋蔵文化財センターの設立と調査部長に 神村 透 …1      | ■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第144回) 立木宏明 …3 |
| ■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第11回) 岡田淳子 …2 | ■考古学者の書棚 「植物考古学と日本の農耕の起源」 稲垣自由 …4      |

## 考古学の履歴書

## 過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第11回) 岡田 淳子

## ① プエブロ遺跡の形成

北米で目立つ遺跡は、北米中部を南北に走るマウンド文化の墳丘と、ニューメキシコ・アリゾナ州に広がるプエブロ族の遺跡であろう。

ことに北米南西部のプエブロ族の祖先が残したアパートメント型の集落遺跡は、興味深い資料を提供してくれている。乾燥地帯で、木材、草本、作物など植物性遺物のほとんどが残っているためである。これぞ、私が探し求めていた研究資料の一つと直感した。調査報告書や現地で購入された多くの小さな印刷物に当たり、遺跡博物館を収蔵庫まで訪ね、何度も遺跡に滞在して引き出した結果が、後に書いた「遺跡形成論—プエブロ族の事例を中心として—」(国立音大紀要8)である。

プエブロの前身は、バスケット・メーカーとして2000年以上前まで遡ることができる。未だ土器をもたず、1mも掘り込んだ竪穴住居に住んでいた。それが同じ地域で「日干し煉瓦」を屋壁にして地上に出て暮らすようになり、バスケットに粘土を貼り付けて焼いたことが始まりで、土器作りを成功させた証拠も見つかっている。

生業は[トウモロコシ]を主とする農耕であり、川沿いに畑を作って年に一度収穫していた。農耕社会はよほどのことが無い限り居住地を移さないことも確認できた。農地を準備する労力が必要なため、20世紀のプエブロ族も何百年もの間、同じところに住み続けていた。家族が増えると部屋を継ぎ足して造り、何代にも亘る集合住宅は次第に大きくなり、一つの村落のように成長して行く。はじめは一階建だったものが、二階、三階建になり、ついには五階建のものまで現れた。住人が亡くなると、その部屋の中に埋葬することもあった。リトル・コロラド川やヒラ川の流域では、台状の地形(メサ)の上に家を造り、やがて崖の凹みの岩陰や、川岸に近いところまで、居住域を広げている。

弧状や方形に形作られた集合住宅の中庭(パティオ)は農作業の場所で、私たちが縄文遺跡で見るとような石皿が並べられ、女性たちが一日中、乾燥したトウモロコシを粉に挽いた。一階の天井は、径10センチほどの丸太を何本も渡し、その上<sup>むしろ</sup>のようなものを敷いて粘土で固める。一階の天井は、2階の床を兼ねている。居住する部屋は四角だが、霊的行事を行う部屋は円形が多く、一階または地下に作られることが通常であった。丸太の木材は、年輪年代法(デンドロクロノロジー)によって実年代が特定され、その家が何年に造られたかを知ることができる。

西暦1000年前後に、この地域は干ばつに見舞われ、旱魃が数年続くと種として保存しておいたトウモロコシまで食料にしなければならなくなり、ついには引越を余儀なくされた。彼らはまた戻ってくることを信じて窓や入口を粘土で塞ぎ、リオ・グランデを下ったのだった。干ばつは容赦なく続き、ついには彼ら自身の世代では戻ってくるができなかった。

住地を動かさないだけでなく、遠方へ移動する場合は、持てる量以外の生活用具は置いて行くことになる。遺物がたくさん

残される理由である。反対に、近くへ移動するときは次々に何回も運び、遺物があまり残されない。私はこの遺跡形成のあり方と、認識できる特徴



▲「アカマ・スカインディー」と呼ばれるプエブロ族の村、350年の歴史をもつ(1979年8月撮影)

を、かなり詳しく分析したが、これが農耕村落を移動する一つのパターンであった。

20世紀に在住のプエブロの中には350年も同じところに住んでいる人たちがいた。そんなところにも現代文明の波は否応なく押し寄せて、1990年前後には現代社会で生きるため国道の近くに居住小屋を建てる人が出てきた。プエブロの生活文化は20世紀末から徐々に変わったに相違ない。

1960年代半ばから私は遺跡だけでなく、何度もプエブロの村を訪問する機会を得てきた。アカマ、ナンベ、サン・タアナ、サン・イルデホンソなどである。ある時、グリーンコーン祭りの当日に出遭って、トウモロコシを粉に挽き土窯で焼いたお煎餅のようなパンや、新たに彼らが栽培を始めたプラムを食べたり、民族特有の衣服を求めたりした。

「この衣装は、あなたには大きすぎるので直してあげる。どここの村から来たの?」と聞かれた。明らかに同族と思われたのだ。ここで名乗るのも似つかわしくないので、その頃住んでいた字名「ばんなぐろ」と応えると、「それは遠い」今でなくても何時でも直してあげるからと言って、衣装と引き換えに90ドルを受け取ってくれた。勤務大学で教材に用い、今は北方民族博物館に参考資料として保管されている。

一年だけ大学院に通って修士論文を提出し、学位を取得した留学時代の友人が、この地域の「バンデリエ国立史跡公園」で働いていた。まじめで実質的知識の豊富な彼から、私は多くのことを学び、優しい奥さんと可愛い小さなお子さんがいる自宅にも呼んでもらった。彼の家も、プエブロと同じく床を少し掘り窪めて低くし、レンガを積んだような壁で暑さ対策の行き届いた家であった。それから10年余り後に行ったとき、手を尽くして探したが、彼の所在を突き止めることはできなかった。とても残念に思っている。

## 略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回からは間壁忠彦先生・間壁霞子先生の連載が始まります。



## J レーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 144

## 樽口遺跡 ～新潟県村上市～

立木 宏明

私の思い出の遺跡は、山形県と境を接する三面地区(旧岩船郡朝日村)に所在する。当遺跡を含む奥三面ダム関連遺跡群の発掘調査は1988年から始まるが、私が県から朝日村教委の奥三面遺跡調査室に派遣されたのは、遺跡群調査が佳境に入った1993年である。当時の奥三面地域では、三面集落の移転が終了し、ダム躯体工事、このためのコンクリートプラント建設、周辺道路整備などあちこちで工事が進められていた。その光景は民俗文化映像研究所による記録映画『越後奥三面一山に生かされた日々』(1984)に描かれた自然豊かな景観とは同じ場所と思えない景色が広がっていた。しかし、工事個所以外に目を転ずると、早春にはカタクリや一輪草が咲き乱れ、ギフチョウが舞う自然豊かな情景も見られた。

遺跡は三面川と末沢川の合流点に位置し、河成段丘上に立地する。大学卒業後、3年間の教員を経て、仕事として初めて遺跡発掘調査の調査員として従事した私にとって、学生時代の発掘とは勝手が違い戸惑ったことを覚えている。調査に先立ち前年度調査で出土した遺物を調べたところ、中段の遺物に黒曜石製の細石刃石核などが見つかったため、5月から始まった中段の追加調査では、下層から旧石器が出ることを期待して、徹底的に掘り下げたが発見できなかった。あきらめかけていた初夏に中・下段の完掘写真を撮るため、中段との比高差が15m近くある標高210m地点の一部を伐採したところ、1mを超す凝灰岩の巨岩がごろごろするような場所ではあるが、わずかな平坦地も確認した。ダム水没水位より低いいため、写真撮影後に周辺のヤブツバキを伐採し、2×2mのトレンチを4か所ほど入れたところ、巨岩の間のわずかに顔を見せる黄褐色ローム層から黒曜石製の細石刃石核や剥片類が出土した。樽口遺跡が旧石器遺跡として確認された瞬間である。細石刃石核は「白滝型」に類似すると直感したが、狐につままれたような気持であった。引き続き標高210mライン前後の伐採を進めたが、現地は傾斜がきつく、バックホーはもとより巨石のため草刈機も使用できない状況であった。作業員には山仕事にも慣れた旧三面集落の現役の「マタギ」などもおり、鉋だけでヤブツバキなどの堅木を伐採していく様子は、まるで開墾作業のようだった。瞬く間に緩やかな平坦面が姿を現し、上段と命名した。

さらに試掘を重ねた結果、ナイフ形石器や石刃などが出土しはじめ、最初は「細石刃文化」の単純遺跡と考えていたが、重層的に旧石器が出土することを確認した。最終的にはA地区とB地区の2地区に遺物が出土することが分かり、西側のA地区か



▲1994年度樽口遺跡遠景(三面川対岸の宇連萩山方向より)

ら本調査を開始した。遺跡の斜面に直行するように土層観察用のベルトを設置し掘り始めると発掘は困難を極めた。基盤層に含まれる凝灰岩の巨岩が樽山(標高621m)方向から多数落下しており、岩盤掘削用のコンプレッサーを用いての調査である。特にA地区東側の表土は巨岩を取るとその隙間に小礫が堆積し、場所によっては土より岩のほうが多い始末で、崖錐堆積が累々としていた。それを除去すると岩の間に若干の黄褐色風化火山灰層が出現し、石器が上層から出土し始めた。また段丘礫の直上にきめ細かいガラス質粒子を含む層が堆積していた。その堆積は岩を縫うようにパッチ状であった。その直下からナイフ形石器(東山型ナイフ形石器文化層)が出土した。この層は、のちに始良・丹沢火山灰層(AT)のほぼ純層であることが明らかとなった。また、地点ごとに層位的に異なる遺物が出土し始めたため、層位の認定に手間取ったが、遺物は旧石器調査の基本の通りに、出土位置を点上げで記録した。層位は各地区に共通する鍵層を把握し、繋げていく方法をとった。それからの調査は、鍵層の層位のベルト観察を主にした。崖錐堆積の風化火山灰中から出土する石器出土状況は、その後の各種学会の調査報告や調査報告書で発表しているが火山灰との関係など、未だうまく説明できていないと自分自身で感じるほど特殊な状況だった。調査途中で晩秋を迎え、11月末の調査を終了する直前AT上面から、「瀬戸内系のナイフ形石器」が出土した。これまた当時の新潟県では類例が少なく、驚きを禁じ得なかった。その翌朝、現地は雪に包まれ、公用車で行くのが困難なほどであった。最低限の養生をして調査を終了した。

1994年度の調査はA地区の一部とB地区である。8月上旬に三面川対岸の宇連萩山中腹から遠景写真を撮影した折、同行した旧三面集落の方がその道中「まむし」を捕まえた。したがって、本文の遠景写真は、相当怖い思いをして撮影したものである。調査は夏以降順調に進み、A地区でAT下位の段丘礫直上からナイフ形石器を持つ文化層を検出し、B地区で杉久保型と東山型のナイフ形石器が出土した各文化層の調査を行った。両文化層がATより上位から出土するなどの成果が上がり、晩秋には3年に及び調査が終了した。

最終的に旧石器時代を8文化層で区分し、報告した樽口遺跡調査報告書刊行から今年で20年になる。暑い夏の調査や膨大な石器実測の整理作業など、今でも時々思い出すが、過酷な中にも日々新発見のあった充実した時間であった。

最後に重要な遺跡の報告書作成を20代の若造に託して下さった当時の奥三面遺跡調査室の上司・樽口遺跡調査担当、調査時の私の無理難題に付き合ってくれた同僚、現地調査を支えてくれた旧三面集落出身の方々をはじめ、延べ100人を超える作業員には大変感謝している。遺跡の内容に対して、全ての情報量を盛り込めなかった報告書には、自分自身の力量を感じるが、最低限の報告はできたものと考えている。幸いにも約15,000点にも及び旧石器時代遺物のうち3,000点は、2003年に県指定文化財(考古資料)に指定され、『縄文の里・朝日-奥三面歴史交流館-』で展示されている。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは大森隆志さんです。

## 考 古学者の書棚

## 「植物考古学と日本の農耕の起源」

中山誠二 著／同成社(2010)

稲垣 自由

私が本書の著者である中山誠二氏と初めてお会いしたのは、私が大学三年生の頃、実家に帰省して発掘調査のアルバイトをしている時だった。熟練の作業員の中に混ざり、ひたすらジョレンがけをしていた私の姿はある意味浮いて見えていたのかもしれない。中山氏は現場の調査員ではなく、たまたま現場に立ち寄りただけであったが、私に声をかけてくれた。

「静岡大学の学生なんだってね。篠原先生にはいつもお世話になっているよ。頑張りたまえ。知識と技術を身に着けたら山梨に戻っておいで。」

本人はきっと忘れているだろう。しかし、当時より私は弥生土器と古式土師器に興味を持っていたため、中山氏が山梨県で弥生時代研究を精力的に進めている人物であることを知っており、お会いできたこと、声をかけられたことに一種のありがたみを感じていた。その後、熊本大学の小畑弘己氏を招いて開催された山梨県考古学協会定期総会の記念講演や、山梨県考古学協会設立30周年記念講演会で行われた中山氏の「縄文時代に農耕はあったのか?」と題された講演を聞き、人類の植物利用のあり方について興味をもち、試料汚染の危険性がなく、時期比定も比較的容易なレプリカ・セム法と呼ばれる分析方法にも関心をもつようになった。そして、これらの講演会を通じて学生ながら発掘調査報告書の見方も変わった。これまで何かについて調べる場合、まず調査区の全体図を見てどんな遺構があるのかをざっと確認したのち、遺物の実測図を見て対象となる遺物を確認し、それがどの遺構のどの場所からどのような状態で出土しているのかを図面と文章で把握し、付箋を貼り、ノートにメモをするということをひたすら繰り返していたのだが、動植物遺存体や火山灰等についての分析結果が記された自然科学分析結果の記載にも注目するようになった。残念ながら卒業論文は既に別テーマを設定していたため、反映することはできなかったが、研究室にあったシリコーンを拓本練習用の縄文土器片に注入して作成した施工具のレプリカや、火山灰のサンプルを後輩に見せては、これがレプリカ法だ、これは〇〇火山灰だ、などと今思えば恥ずかしいようなことだが声高に解説していた記憶がある。

さて本書であるが、第I章から第VII章までの7つの章で構成されている。以下に内容について簡略に触れていきたい。

第I章では、日本列島の栽培植物、農耕起源に関する研究史について、考古学側からどのようなアプローチが行われてきたかということのみではなく、民族学、民族植物学、農学、遺伝学、植物考古学、古民族植物学といった幅広い分野を含めた研究史がまとめられており、大いに参考になる。第II章から植物栽培起源研究の方法へとなるが、中でも本書の分析の核となるレプリカ・セム法について、レプリカの作成手順や方法について写真付きで細かく記載されているため、手法について理解しやすい。続く第III章では、レプリカ資料の種実同定に必要な種実の特徴が現生資料のSEM画像とともに解説されており、レプリカの観察を行う上で非常に参考になる。第IV章では、1970年後

半から2006年までに東日本で報告されている植物遺存体について集成し、うち縄文時代草創期から弥生時代中期初頭までの113件の栽培植物遺存体について、その資料の評価をランク付けしながら紹介している。このなかで植物利用の開始時期を第I段階から第III段階の3つの段階にわけ、栽培植物の出現時期と展開について整理している。第V章では、中部・関東地方の縄文時代から弥生時代中期までの9遺跡より確認された圧痕土器をレプリカ・セム法にて分析し、種の同定を行っている。特に、縄文前期～中期の土器より確認されたマメ科植物の発見頻度の高さ注目している。さらに、山梨県香舌場遺跡でダイズ圧痕が確認された土器をX線およびCTスキャンを用いた調査で発見した土器内部のダイズについても触れており、圧痕が確認できる植物が偏っていること、近接して同一種の植物種子が確認される例があることから、種実の土器への意図的混入を推測していることは大変興味深い。第VI章では、第V章にて高い頻度で確認された縄文ダイズについて、種実の形状や大きさについて計測し、現生ダイズと比較し、縄文ダイズは野生のツルマメと栽培ダイズを繋ぐ栽培化初期段階のダイズである可能性を指摘しており注目される。そして一連の考察を通じて、栽培植物には日本列島に自生していた野生種が栽培化されたものと、日本列島以外からのものがあることを論じている。第VII章では、稲作の開始と定着に関するこれまでの研究の現状を整理し、さらに農耕社会の出現と農耕化の意味について多角度から論じている。最後にまとめとして、縄文時代草創期～早期の定住化と野生植物の利用、栽培植物が出現する段階から弥生時代早期～中期の農耕社会の誕生までの段階までを4つに分けて整理している。

最近では、第II章にて紹介したレプリカ作成用シリコーンは、硬化時間短縮のため歯科用シリコーンを用いることが一般的となり、またレプリカ・セム法も種実圧痕のみに限定せず、生物の圧痕や玉類の穿孔痕の観察に用いられるなど、日々深化を続け、考古遺物より引き出せる情報は格段に増えてきている。

本書は非常に専門的な書であり、おおよそ一般向けの書物ではない。しかし、本書の考察の柱となっているのは、資料一つ一つを細かく分析した成果の積み重ねであり、視点を変え、資料から新たな情報を引き出した成果であるといえる。資料一つ一つにあたるということは地道な作業の連続であるが、引き出したい情報を明確にし、資料を細かく分析することによって、より深い情報を得ることができるといえる最も基本的なことを強く再認識させられる書である。

## アルカ通信 No.151

発行日	2016年4月1日
企画	角張淳一(故人)
発行所	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL : <a href="http://www.aruka.co.jp">http://www.aruka.co.jp</a>